

O v e r V i e w

オーバービュー

Keiichi Hanaoka

華岡 慶一

華岡青洲記念心臓血管クリニック



いつものように締め切りぎりぎりまで原稿を書き進めていて、ふとカレンダーを見ると、今週の5月12日は看護の日であることに気が付いた。ナイチンゲールの誕生日が、彼女の看護に対する業績を称えて設定された記念日である。

フローレンス・ナイチンゲールは、クリミア戦争において従軍看護団を率いて参加した。クリミアの天使と称された献身的な看護によって、最終的に野戦病院の死亡率を劇的に改善した彼女は、近代看護学成立の最大功労者であるとする見解は、実は極めて表層的な表現である。というのも、彼女は近代統計学の発展に貢献し、王立統計学会のメンバーになった統計学者でもあるからだ。彼女は1854年からの2年間、スクタリ野戦病院の兵士の死亡原因を調査し、兵士の戦闘による死亡は2割以下であり、大多数は劣悪な院内環境や兵站（ロジスティクス）の非効率による感染症や栄養失調といった、改善可能な要因によって命を落としたという事実を明らかにした。さらに、その結果を印象的なダイアグラムにして政府関係者にあたり、分断的な官僚主義に風穴をあけ、対策し、上記の結果を出した。明確な目的と強い意思で統計を手段として使い、そのパワーを示した好例と言えよう。その頃の日本は江戸時代末期である。実験医学という概念がなかった時代に、動物実験を20年にわたって続けてもFIMをためらった先人の学問的苦勞を考えると、感慨深いものがある。

論理的な構成を持つ領域において他者を説得、納得させるには、統計という手段なくして成立しない。論文や交渉においては、明確な主張を支持、補強する目的で統計が使用される。われわれ臨床医は、診断、治療を決定するうえで、その根拠とする主張（クリニカルクエスチョンの答）を吟味する際に、因果律の正当性、統計手法とその解釈の妥当性を確かめなければならない。そのために、最低



限の統計リテラシーを必要とする。

本特集では、そのような意識を持ちながら日々の臨床に忙しい先生方にもなじみのある、おそらく一読されたことがあると思われる論文を題材に、一流の統計学の専門家がその統計を語るという形式をとった。特集の趣旨や内容については、共同編集者で、本特集の企画段階からかかわってくれた当クリニックの管家鉄平先生が後述しているのでこれ以上は触れないが、彼には大変感謝している。また、執筆者の人選、学術的アドバイスをくださった北海道大学の伊藤陽一先生にも大変お世話になり、この場を借りて深謝したい。

最後に、ビッグデータや AI のパワーが語られる現在であるが、国会や世界情勢を見るにつけ、結局は人間がそれをどう使うかなのだと思う。活物窮理の道は深い…。